少年・少女たちの心情と共振する工夫の努力を

ある学生から「最近のいじめによる自殺や自殺予告の事件を、先生はどう思っていますか？」と、ストレイトな質問メール。

なるべく解り易くと思い、次のように返信した。

【　少年・少女期は思春期と重なりますよね。

思春期とは、子どもから大人への体質が変わる時でもあります。

身体的なことだけでなく、それまでの体感、実体験から学ぶ「自分が活動することを生きている」状態（具体的操作期）から、周りとの関係で自己を見つめようとし出し、概念思考等で「周りとの関係で自己が生きること」を考え出す時期（形式的操作期）でもあるのでないかと思います。

それだけに、実体験と概念思考との狭間で戸惑うことも多いのでないかと思っています。

正に、「思春期」の漢字は、自己を生きることを考え（思）始め出す（春）頃（期）ということを意味しているのでないかと、勝手に解釈しています。

その狭間から抜け出す術が自身の中でまだ十分に育まれていないことから、身近な周り（友人等）から更に狭間に押し込められるようなこと（いじめ等）があると、自分の中でどうしていいか（考えていいか）が解らず、そんな自分から逃げたく、その一つの方法として死を思うようになるのかなとも考えられます。

言い換えれば、正に思春期で、客体としての自分を見つめるようになってきている証とも云えます。

自分を振り返ってみると、自分にも思春期がありましたから、「死のかなあ」と思った事も度々あったように思います。

そんな時、「意識として、死んじゃえばいい。死んだ気になれば何でも出来る。」と勇気を奮い立たせながら、友人と語り合い、本を読み、その狭間から抜け出す術を徐々に身につけ、乗り越えて来たかなと思えます。

自分は迷うことの多い弱い人間だけに、何度も生まれ変わり勇気が必要だったのかもね。

ある恩師は、学級の全生徒一人一人に交換日記を用意してくれ、一人一人の心情に、音叉のように共振してくれました。

周りの大人がなすべきことは、「今時の少年・少女たちの心は理解できない」等と云わず、狭間で揺れ動くその子の心情とまずは共振する工夫の努力をすることから、支援が始まるような気がしています。

質問の答えになっていないかと思いますが、少年・少女たちの心情の理解の一助となり、あなたがこれから何をするかの一つの参考になれば幸いです。　】

（2006 年 11 月 19 日　記）